



# みんなでピカソ

創造的能力を開発する五つ  
の方法

kamejyu

## はじめに

---

自分の考えを形にできる、これは楽しいことです。マスメディアからマルチメディアへの移行は、自分の考えを形にすることに大変便利になりました。

例えば、いま大流行のブログがその例です。これは「ウェブ」と「ログ」を合わせた言葉で、常に書き残す、更新するといった意味で、簡単に開設でき、更新も手間がかからず、他のブログともつながり易いなどインターネットの特徴を生かしたアメリカ生まれのシステムで、今日本でブレイクしています。

特に社長ブログが人気で、ちょっと覗いてみればお分かりになりますが、非常に面白い。しかもビジネスにも十分効果的です。自己表現の得意な社長さんが実に多いということがわかります。子供のお絵かきさながら、大人の楽書き（落書き）といった感じのものもありますが、楽しくやっておられます。

やたら社会が合理化されてしまい、分業化され表現力を生かす場がなくその表現の場にブログが選ばれたのでしょうか。自己表現をアート（芸術）にまで高めたい、ビジネスにも生かしたい、芸術家岡本太郎さんは『今は、すべてが「金の世の中」だから、どうして儲けるかということがすべてのプログラムだ。今日、文化・芸術こそ、その原動力だということに気がつかなければいけない』と言っておられる。

文化的・芸術的な印刷広告を作る、衣・食・住・遊で垢抜けた自分好みのデザインを考える、表現することに十分な知識をお持ちでいらっしゃるあなた様が、心で思っていることを手の趣くままに楽しみながら、表現していただきたい、そんな気持ちで小冊子「みんなでピカソ」を作りました。

カタログが単なる製品案内であっては見てもらえない、チラシの価格訴求も限界だ、人は自己表現したいもの、製品カタログで自己表現してみましよう、チラシにこだわりを入れて見たら、写真はデジカメでお洒落に撮って入れよう。はやくいえばカタログのブログ化といったものが「みんなでピカソ」です。石原都知事もコンテンツ・ビジネスが二十一世紀の日本経済の牽引役だとおっしゃっています。

もしかしたらあなた様の作られるカタログがコンテンツになり高く売れるかも知れません。情報誌のようなカタログ、カタログのような情報誌を作って、生活に生命感あふれる芸術を印刷広告に取り入れ、閉塞感を打破しましょう。

この小冊子があなた様の『見るから創ることへのConversion Guide』のお役に立てれば、うれしいかぎりです。

## 第一章 岡本太郎さんの芸術

ずっとデザインの仕事に携わってきて、実は岡本太郎さんに出会ったのは、ブック・オフで、しかも、岡本敏子さんの書いた「恋愛芸術家」という本でした。恋愛芸術家ってなんだ、変な本だなと買ってしまいました。

“芸術は爆発だ、”とテレビで目をむいていた無邪気なおっさんが、その恋愛芸術家だった訳です。お父さんは岡本一平さん、お母さんはかの子さんで作家、画家の宗像志功さんの観音さんのモデルといわれている人。一平さんは漫画家でたいへんな売れっ子だったそうです。

はやい話が芸術一家のサラブレッドといったところでしょう。この岡本太郎さんの絵や制作物それに多くの書き物を読んだり、勿論、記念館に行ったり、だんだんと岡本太郎さんの魅力の虜になりました。「あなたは画家ですか、彫刻家ですか」と聞かれると、「私は人間です」と答える、この純な人格にのめり込み、研究し、岡本太郎さんが縄文土器に日本人の美を発見したことを知ったとき、涙があふれてきました。

ちょうど不景気でリストラの嵐が吹き荒れているときだったのですが、なぜか体に力がみなぎってくるのがわかりました。これが芸術なんだ、芸術というのは倉に大事に仕舞い込むものではなく、力を与えてくれるものであり、創ることによって命が輝きはじめることなんだ。これがすなわち「芸術は爆発だ！」ということに気付かされました。

「縄文こそ日本だ」

自分が自分自身であるということ----絶望的だ。とともに、誇らしく、仕様がなないことだ。年を重ねるに従って、ますます思う。だから、日本文化とは何かというような枠ぎめには興味が湧かない。そういうことにひっかからない方がいいとさえ思う。自分という存在を、宇宙にむかってパーッと開く。突き出して行く。それが「日本」であろうとなかろうと、知ったこっちゃないという気持だ。しかし、私も今まで、私の日本文化論というべきものを随分やってきた。『日本の伝統』『日本再発見』『神秘日本』『沖縄文化論----忘れられた日本』などは、自分のいのちの燃え上がり方、そのナマな切れれば血の出る特質を見極めて見たいという作業だった。私は一般的通念になかった、いわゆる普遍とは思われないもの。パティキュラーな、それ故にもろく、伝わりにくい、いのちのあり方そのものに共感したように思う。縄文との衝撃的な出会いは、私の日本観を変えた。その頃、`日本的、`とされていた、ちまちまと平面的な美意識・生活感とはまるで異質な、分厚く、激しく、どろどろして、しかも鋭く透った生命感。縄文土器のあの凄みは、超自然と直結した縄文人の宇宙感そのものなのだ。一つ一つがまったく独自で、似たパターンがない。このイマジネーションの豊かさも驚異だ。とくに画一化され、形式にとられる近代以降の日本人とはまるで違った人間像が、どんな小さな造型にもそそりたって見える。これこそ日本だ、というよりも、私そのものだ。総身の血が沸き立ち、戦慄した。この後、平泉で、蝦夷の造型の凝集と思われる小さな鹿の角の彫刻（藤原基衡の棺に収められていた守刀の柄の飾り）を見た時も、同質の感動で全身が熱くなった。これとは一見異質のように思われるが、実に深い底で会通している生命感の原型を、私は沖縄で直感した。常に流れる、凝滞ない命のあり方。ある時は無邪気といってもいい。残酷でもある。そして破廉恥と思えるほどこだわりがない。それは西欧やアラブの固執する精神-----物にも論理にも徹底的にこだわり、追求し、構築し、執

着し、目には目を、としつこく何代でも忘れないという構えとはまったく別の精神構造だ。いのちを固定化し、押しとどめようとするものを本能的に嫌う。「もの」に執着しない、というより「もの」を拒否する生命感。現代日本人も、実は今もって案外この生命のあり方に、深いところで律しられているのだ。もう少し現代にそくして、切りひらいてみたい課題だと思っている。

(岡本太郎 眼美しく怒れ より)

あらゆるところで「開く」という言葉を使っている、このことこそが人間が人間としていきる、しゅんかん、瞬間よろこびが満ちあふれる生き方。

あまりにも我々は心を閉ざし、あたかも心を開くことが、損でもするように感じるのは私だけだろうか。

そう、おおらかに、真剣に命がけで人生を無条件に遊ぶ、

これが岡本太郎さんの芸術で、縄文の生命感なんです。

まさに岡本太郎に乾杯！

---

『恋愛芸術家』 著者 岡本 敏子 発行所 (株)マガジンハウス

『法華教・観音経』感動の源泉を訪ねて 著者 岡本 かの子 発行所 潮文社



縄文土器

新潟県十日町市博物館

重要文化財



縄文中期

北橋村教育委員会

岡本太郎著作集

- |          |        |
|----------|--------|
| 『日本の伝統』  | 講談社    |
| 『神秘日本』   | みすず書房  |
| 『沖縄文化論』  | 中央公論社  |
| 『美の呪力』   | 新潮社    |
| 『今日の芸術』  | 講談社    |
| 『呪術誕生』   | みすず書房  |
| 『眼美しく怒れ』 | チクマ秀版社 |

## 第二章 縄文の美に思う

---

二つの土偶をみてほしい。あどけない顔に豊満な肉体のアンバランス、そしてプロフィールが美しい八頭身の美女の土偶。これらの土偶は何の目的を持ったものかは不明だが、それにしても私を虜にしてしまう。

この土偶が一万年前もまえのものであることは衝撃であり、芸術の今日性、時代超越性である。私たちに迫ってくるこの美しいと感じる心は日本の芸術の素なんです。

この三点の笑顔を見て欲しい。縄文、弥生、古墳の笑いである。

ここに集めた笑いは、心からの笑いであり、縄文の笑いの豪快さには、おもわずこちらも笑みを浮かべそうになります。こんな心からの笑いが今、表現できるでしょうか。

否、私たちがこんな笑顔をして笑っているだろうか、100年後、300年後の子孫に我々の笑顔を残してみたいと思う。

ピカソはアフリカの民族芸術のお面に触発されて「アヴィニヨンの女たち」を描いた。

岡本太郎さんは縄文土器と土偶に啓発されて太陽の塔を作り上げた、古代縄文の美に触れることで私たちのたましいが何かを感じ、生きるエネルギーとしてくれる。

そして我々もまた、表現者へアウトヘブンしていくことを夢見る。

---



縄文人の笑い



弥生人の笑い



国宝

茅野市尖石考古館



山形県立博物館



古墳人の笑い

『美術館へ行こう』

『大昔の美に想う』 著者 佐原 真 発行所 新潮社



ピカソ

アヴィニヨンの女たち



縄文の美  
太陽の塔

### 第三章 自分探しの旅

---

自分とは何だろう。こう自らに問わないではいけない。

人間中心主義、お金主義の世の中で、もう少し愉快地に生きられる方法はないものか。

本気で生きる、平凡な日常を大切に生きる、人間中心だけれども、森羅万象に美を見つける。お金主義だけれど経済の豊かさの中に善を求める。人間の欲望を数えると8万4千あるといわれる。

この欲望を芸術という心の理解を超えた命の相（あらわれ）として完結していく。

「夢を実現させる9つの法則」という本があるが、自分の夢が何であり、自分の命がなにを求めているのか、そのことを考えることが自分探しの旅であろう。

人は快と思うことを求め、不快と思うことを避ける、この快・不快にこそ自分探しの鍵が隠されている。

知識・情報を詰め込みすぎず、流れ込もうとする知識・情報をストップさせることも時には必要なこと。入れるよりも出すこと、生きるに十分な知識・情報を持っている。

ここで心に思ったこと、手のおもむくまま、そんなことを絵にしてみることで「命の輝く瞬間」をつかめる。

生き乍らにして脳の呪縛から開放されようという法が禅なのだ。（京極 夏彦 鉄鼠の檻）

脳の呪縛から解き放たれたいと願う心は、安心を得たい、それも無条件の安心を。それは、脳が命じる安心を得たいという欲望さえ捨てなければならないということ。

人は本能的欲望から、出発し、無欲になりたいという欲望を持つにいたる。この無欲を求める願望を本気という。

自分とは何かの答えもである。

---

『もう一つの間観』 著者 和田 重正 発行所 地湧社

『夢を実現させる9つの法則』 著者 ジェームス・スキナー 発行所 幻冬社

『「芸術力」の磨き方』 著者 林 望 発行所 P h P 研究所

『鉄鼠の檻』 著者 京極 夏彦 発行所 講談社文庫

『脳を超えてハラで生きる』 著者 松村 邦男 地湧社



## 第四章 新しいコンテンツ・ビジネス始まる

---

二十一世紀が始まって5年目を迎えます。

少しだけ自分の生き方を変えてみたい、変えたらどうなるだろう。と考えながら、自分の家族の生活をカレンダーにしてみました。家族総出演です。

都会の片隅で家族が小さな幸せを感じながら暮らしている様子が出せたのではないかと自画自賛しています。

カレンダーに出てくる出演者は、すべて粘土で作ったものです。そういう意味では、縄文時代の土偶と同じでしょうか。自然とうまく共存し、新鮮な食を採り、体を使って生き、家族や集団の絆やあたたかさを抱きながら生きていた縄文人の生き方を少しだけ自分の中で取り返せた気がします。

生活の中に生命感あふれる遊びがない。それが現代の空虚だ。つまり芸術が欠けている。（太陽の人、岡本太郎氏）といわれるほど、空虚な生活をしているとは考えたくはありませんが、ただ、なにか満たされていないのは事実のようです。

自分とは一体なんなんだろうと小学生のようなことを考えてみました。若手漫才のゴルゴの流行させた命（いのち）だということに気がついたわけです。漫才あなどれずです。

その命が燦燦と輝いていたであろう縄文時代が二十一世紀を生きるわれわれのモデルになるのではないだろうか、その考えが私の脳裏にあり続け、いまなおそこにあり続けます。

われわれがどこかに置き忘れてきた、自由奔放なエネルギーと、独特で豊饒な文化、縄文文化は間違いなく私たちの未来へのモノサシになるはずです。

このカレンダーは社名などのコマーシャルは入れていませんが、「家に持ち帰ったら、孫が喜んでくれた」、「社内で評判になり、じゃんけんで決めた」、「家族って大切なんだなと思った」、「元気をもらえた」などたくさんのお言葉がもらえました。

表現することは楽しく、そして楽しんでもらえる素晴らしいことだということに気がつきました。

古代縄文の時代より我々は創ることに、喜び楽しみそして生きる力を見つけてきたのです。二十一世紀、ビジネスはコンテンツ（情報）化し始めました。傑出した人たちは、情報の共感化でコミュニケーション作りを始めています。

情報のコンテンツ化をする最良の方法があります。それは「情報を発信すること、結果としてビジネスがコンテンツ化していく」というのが最も確立が高い、サクセスモデルです。

時代はコンテンツを要求しています。



『「森の思想」が人類を救う』 著者 梅原 猛 発行所 小学館

『知恵のマーケティング』二十一世紀に向けての第五次産業論 著者 水野 誠一 発行所 同  
文書院インター

『踊るコンテンツ・ビジネス』 著者 畠山 けんじ 発行所 小学館

## 第五章 遊びが命

---

一切の芸術は兄弟です。その奥底は同じものです。人世における人間精神の表現ですからね。方法だけが違うんです。

文学者は言葉を用い、彫刻家は凹凸を用い、画家は線と色とを用います。

けれどもその事は、人が考えるほどそんなに重要ではありません。方法というものはその翻訳するところの奥底のものによって始めて価値がでるものですから（ロダンの言葉より）

雑誌風のカatalog、カatalog風の雑誌があってもいいんじゃないでしょうか。雑誌もカatalogも売ることを前提に作られています。雑誌で情報を見る、カatalogで商品を探す、これはこれで強いインパクトがあります。だが最近なにか見ることに虚しさ感じるのは私だけでしょうか。

もっと雑誌にカatalog情報があっても良いと思うし、製品紹介のカatalogに芸術があれば、楽しくなる。

生きる糧は、ものからアートに移行していることを感じます。

そして、芸術は無意味な遊びであってもいいんじゃないか、この遊びの中に芸術が求められているのであり、遊びこそがエネルギーなのです。

遊びのない生活、遊びのない創造というのは本来はありえないものです。なぜならば、創造といはいのちが命を生み出すことであり、そしていのちは、進化という自己表現をします。

この命の進化の自己表現を疎外するものは「自己の中にある憎悪の感情」です。この憎悪の感情を克服することが命の目的であり、進化・創造です。

これは「遊び」という行為（芸術）を通してのみ実現されるものです。

今、成功しているビジネスを見た時、それは遊びのメソッドが確立しているところが面白く伸びています。つまり「かくれんぼしましょ、かくれんぼするものこの指とまれ」。これがこの時代に必要なエネルギーです。コンテンツの提供はこの遊びのメソッドの提供として確立してゆきます。

「遊び」というとイコール「娯楽」と考えがちですが、勿論、旅行に行ったり、スポーツしたり、芸者を揚げて宴会するのも「遊び」です。でも、この場合の「遊び」とは、気持ちの持ち方を言っているのであって、毎日の生活の中に「遊び心」を取り入れて生活を楽しむ、仕事も遊びの一貫と考えれば楽しい……。

そういった意味で「遊びは命」なのです。

かぎりある人生ですから、たのしく芸術しなくては！！

かしこく、目のいいカラスのようい。

---

『古代幻想と自然』 縄文から湯川秀樹まで 著者 高内 壮介 発行所 工作舎

『「森の思想」が人類を救う』 著者 梅原 猛 発行所 小学館

発行： [大同美術印刷株式会社](#)

発行人： [十亀 建廣](#)

発効日：平成二十三年5月10日

創造的能力を開発する五つの方法

衣・食・住・遊・知

みんなでピカソ

見るから創るへのConversion Guide